

【聖書】

使徒言行録 2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2: 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7 人々は驚き怪しんで言った。「話しているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」12 人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。13 しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

1 バベルの塔

ロシアのウクライナ侵攻から一週間以上が経ちました。ロシア軍はヨーロッパ最大の原発を手中に納めるなどして支配を広げ、難民は200万に迫ろうとしているようです。抵抗するウクライナ政府との間で市街戦も起こっており、犠牲者は増え続けています。国際社会でも多数の国々が、ロシアにウクライナからの即時撤退を求めています。ロシアは耳を貸そうとしません。本当にじれったい、言葉が通じない思いがします。20世紀、第二次世界大戦のヨーロッパに生きたユダヤ人ジャーナリストのアーサー・ケストラーは、次のように言いました。「人は領土が欲しくて戦争をするのではなく、言葉を広めるために戦争をするのだ。」このケストラーの言葉は、ある意味真実ではないか、思います。20世紀までヨーロッパの国々は、武力で奪い取った植民地で、自分達の言葉を公用語として現地の人々に押し付けました。日本も朝鮮半島を侵略した時に、朝鮮の人々に日本語を喋ることを強要しました。“言葉”というのは、「民族」とか「国」の実体と言いかえられるかもしれません。言葉が民を造り、民が言葉を作る、自分達がそれを使って他者を支配するための「言葉」。その「言葉」を広めるためにあい争う、又、自分達と同じ「言葉」を語らない人々を「何を考えているか分からない」と排除しようとする、それは私達の普段の生活でも見受けられることです。

そんな人間の性質を、聖書は「バベルの塔」の物語で描き出します。人々は「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。」と言い、バベルの塔を建設し始めます。主なる神は降つ

て来て、人間達の言葉が互いに聞き分けられぬようにされたので、人々は混乱し、全世界に散って行った、それ以来、人々は別々の言葉で考え語り、互いに相争ってきた、と聖書は語るのです。

このバベルの塔の物語によって散らされた人々が一つにされたのが、先々週から礼拝で共に聞いている聖霊降臨の出来事だ、と考える人々がいます。十字架に架かって死んだナザレ人イエスは、三日目に復活した救い主である、と信じる120人近い人々の上に、五旬祭の日、聖霊なる御神が降ります。そして、人々は聖霊が語らせるままに、自分達の言葉とは異なる他の国々の言葉で話し出しました、この出来事が、バベルの塔の物語でバラバラになった人類の回復だ、というのです。確かに120人ほどの人々が語った言葉はばらばらですが、同じ一つのこと、「神の偉大な御業」を語りました。聖霊なる御神は、人々に、人の言葉を超える言葉を語らせました。それは、神と人の間を隔てる壁を打ち破る言葉、新しい言葉だ、と言えると思います。

2 語られた言葉

ですが、表面的には、120人が語っているのは、前からある言葉でした。9節から11節に並んでいる地名、「パルティア、メディア、エラム」「メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネ、リビア地方」「ローマ」「クレタ、アラビア」これらの地方や都市は、2000年前の古代世界、ユダヤの人々が移住していった地域や都市です。ユダヤの人々は、世界各地に移住し、どこに行っても自分達のコミュニティをつくり、聖書の神を礼拝して過ごしました。しかし、普段の生活ではその土地の人々と交わり、その土地の言葉を話すようになりました。やがて、その地方の言葉を自分の故郷の言葉として話す世代も現れます。そのような世界中に散らばったユダヤの人々の中で、信仰心の篤い人たちが、エルサレムにもどってきていたようです。巡礼客として五旬祭を祝いに一時的にエルサレムに滞在した、というのではなくエルサレムへと戻って生活していた人々がいました。彼らは何故エルサレムにもどってきていたのでしょうか？旧約の預言者たちは、「世の終わりに、救い主メシアは、エルサレムに現れる」と預言していたからです。つまり、彼らは、神を待ち望む人々でした。「メシアよ、どうか来てください」という祈りを持って生きていた人々でした。その彼らが、聖霊なる御神が120人に語らせる「それぞれの故郷の言葉」を聞いたのも意味深いことです。私は大分で生まれ育ち、又、広島でも三十年近く生活していましたので、大分弁や広島弁が「故郷の言葉」、大分弁や広島弁で語られた内容は、標準語で話されるよりも心に届くような気持ちがします。「故郷の言葉」とは、その人の心の中心、魂に語り掛ける言葉と言えるのではないのでしょうか。

さて、この時、聖霊なる御神が120人の人々に、何を語らせたか、具体的にルカは記してはいません。聖霊なる御神は、神の偉大なる御業を、メシアを待ち望む一人一人の魂に直接、語り掛ける出来事が起こりました。しかし、霊によって語らされている120人にとっては、自分が語っている言葉は、自分の内側にはない、外の言葉でした。

かつて、主イエスは弟子たちに次のように言われました。「善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」(ルカ6:45)。この聖書を取り次いである牧師は次のような主旨で説教しました。「ある人が失言などして謝罪する時、『心にもない事を言った』と釈明することがありますが、それは真実ではないでしょう。主イエスが仰るように『人は心の内にあることを語る』ものです。ついうっかり口にしたのは『心にもない事』ではなくて、『心の内にあったのだが、気づいていなかった事』です。」その通りだと思います。思わず口から出た言葉を通して、全然自覚していなかった自分の気持ちに気づかされた、という経験を皆さんもお持ちではないでしょうか。

ですが、4節で人々が霊によって語らせられた言葉は、120人の人々の心の中にあった言葉ではありません。外から与えられた言葉です。彼らが知りようもない、「ほかの国々の言葉」だからです。「“霊”が語らせるままに」とある通りに、120人にとっては、「外の言葉」です。聖霊なる御神が降り、炎のような舌がその上にとどまった一人一人。彼らは、自分がちんぷんかんぷんだったよその国の言葉で神の御業を語っており、その意味もはっきり分かることに、本当にびっくりしていたのではないのでしょうか、語っているのは確かに自分の声で、自分の喉から出ている声なのですが、語る内容はおよそ自分が語れる内容ではない、自分にとっては新しい内容を新しい言葉で語っている、そんな聖霊なる御神の業にあっけにとられつつ、語る。聖霊なる御神は、人々に神の言葉を与え語らせる力を持つ方です

3 ウクライナ侵攻に際して語る言葉

さて、ロシア軍がウクライナに侵攻を開始した日以来、ウクライナの首都キエフにいる日本人や日本語を話すウクライナの人々がSNSで情報を発信し始めました。私はそれらを追っていました。心に刺さることがありました。ウクライナ人と結婚した日本人女性で、事情があつて避難できず、キエフに残った人がいました。彼女は、自分達や周辺の様子等を発信していたのですが、ある時、「日本で義勇兵を募集」という駐日ウクライナ大使館の書き込みを再投稿し「私達を助けてください」と呼びかけました。しかし、どうやら「武力に武力で対抗してはいけない」というような正論で諭した人がいたようで、彼女は突然次のような書き込みをしました。「そんな事は私にだって分かっている。だけど、それを今の私に言わないでほしい。とても私には受けとめきれない。」荒れ狂う絶対的な暴力の下に、死の恐怖と不安にさいなまれる彼女の痛みが伝わってきました。

彼女の痛切な書き込みを見た時から、ウクライナの戦禍の中にいる人々の言葉が、私には「神は、一体どこにいるのか？ 一体何をしているのか？」と叫びに思えました。そして、気付くと私も心の内で呟いていました。「神は、一体どこにおられるのか？ 彼らをこのまま憎しみに渡して、お見捨てになるのか」。心の底におりのようにたまった問いかけ、私の内なる言葉でした。

4 十字架に架かっておられる

その事をはっきり意識して「神はどこにいるのか」この叫びを自分の心の内の声だと認めた時、ある一つの声が響いてきました。「そこに、あの十字架に架かっておられる」という声でした。

この私の経験とよく似た経験談が、ハンガリー出身のユダヤ人作家、エリ・ヴィーゼルの「夜」という小説に出てきます。前に一度ご紹介しました。アウシュビッツの収容所で、大人にまじってユダヤ人の幼い子どもが絞首刑になりました、体重の軽い子どもですから、なかなか絶命できず、もがき苦しむ子供の前を、ナチの将校の命令でヴィーゼル達は隊列を組みながら行進させられます、隊列の中の誰かが呟きます。「神はどこにおられるのか。」

ヴィーゼルは次のように記しています。「私は、私の心の中で、ある声はその男にこう答えているのを感じた。『どこにだって。ここにおられる。ここに、この絞首台に吊るされておられる。』」ヴィーゼルは、自分でもこの答えを意外に感じたのではないかと思います。そうでなければ、「ある声はその男にこう答えているのを感じた」等とは表現しなかったでしょう。彼はユダヤ教の信仰に生きた人です。が、それでも人の言葉と想いを超えてくださる聖霊なる御神がヴィーゼルに聴かせた声は、まさに真の神を指し示す言葉であった、と私は思います。誰が思いつくでしょうか。真の神が最も惨めな所に最も悲惨な者達と共に、殺されようとしているとは。

全ての人々の心の内にあり、苦難に直面する時、頭わになる問い「神はどこにおられるのか」。その答えは、全ての人々の罪の為の主イエスの十字架。このお方は、神の御子にも拘わらず、全ての人々の罪を背負い絶望の淵に沈みつつも、「我が神、我が神、何故私を見捨てたのか」と叫びをあげてくださった。父なる御神は、ご自身の独り子をお見捨てになった、しかし、主イエス・キリストは、「神などいない」とは決して仰らず、ただ神を見上げて叫んでくださった。「我が神、我が神」と神と呼ばれた。本当に不思議な事ですが、この神の御子の絶望の中の真実の叫びが、苦しみに呻く人々に力を与えるのです。神は決して見捨てることなく、苦しむあなたと共にいて、あなた以上に苦しみつつ「我が神、我が神」とあなたの代わりに、神を呼んでくださる。

そして、この主イエスの信仰を義として、父なる御神は三日目に永遠の命へと甦らされました。だから、この方のもとこそ、神の国、全知全能の御神の愛が溢れ、どんなことがあろうとも取り去られぬ希望があり、私たちに力を与えてくださるのです。聖霊なる御神が語らせてくださる炎の言葉、それは、主イエス・キリストの十字架と復活、キリストの福音を告げ知らせる言葉であり、これこそ、神の国の言葉です。この世界は私達に問いかけています。声なき声で。「神はどこにいるのか」と。聖霊なる御神は、どんな時も、十字架と復活の主イエス・キリストを指し示す、その時と状況に適した最もふさわしい言葉、あなたの内にはない新しい言葉、神の国の言葉を、私たちに与えてくださいます。聖霊降臨は、このことを私たちに約束してくださる出来事と言えるのではないのでしょうか。

5 神の国

今日の聖書は、バベルの塔の出来事でバラバラにされた人類の回復の物語だ、と解釈する人々がいる、と冒頭で申し上げました。しかし、聖霊降臨で語られているのは、人類の回復の物語の始まりであり、完成ではありません。今日の聖書でも、聖霊なる御神が語りかけたのは、神の民、信仰者でした。神を知らない人々に語りかけたわけではありません。だから、回復の物語は、まだ終わってはいないのです。今日の世界でも、まだ言葉はバラバラで、神の国の言葉は、多くの人々にとってはまだよその国の言葉のままです。

ですが、私達は希望を失いません。何故でしょうか？多くのキリスト者がよい行いにいそしみ、国際平和活動に献身しているからでしょうか。今日も世界中の教会でウクライナとロシアの間の平和を願う祈りがささげられるからでしょうか。多くのキリスト者が、思想信条や宗教を超えて難民救助や困窮する人々の為に奉仕しているからでしょう。

それらの業は確かに尊いことです。しかし、私達が希望を失わないのは、人間の業のゆえではありません。十字架と復活の主がどんな悲慘の中にも苦しみの中にも寄り添い共にいてくださり、永遠の命への道を歩むことを助けてくださるからです。神を見失い、神の国の言葉を忘れかけて、「神はどこにおられるのか」と呻く私達に十字架と復活の主イエスを、聖霊なる御神が指し示してくさるから、そして、主イエス・キリストを証する新しい言葉を与えてくださるからこそ、私たちには神の国への希望とそこに生きる力が与えられます。私たちは、どんな状況であっても、聖霊なる御神の力によって、神の国の言葉を宣べ伝える者とされるのです。

3/2(水)から、イエス・キリストの十字架を思い起こす受難節が始まりました。世界が不安と恐れに包まれる今、受難節を迎える恵に感謝します。聖霊なる御神の力をもって、怖れを希望に変え、全世界のキリスト者と共に声と心を合わせて「主キリストにある平和がなりますように、神の国が来ますように」と新しい言葉で、新しい心で、神の国の到来を祈りたいと願ってやみません。